

「大学体育スポーツ学研究（第17号）」優秀論文賞 選考経過および講評

I. 選考経過

1. 選考対象となる論文

2020年3月に発刊された「大学体育スポーツ学研究（第17号）」（旧雑誌名「大学体育学」）に掲載された10論文（全論文種類を含む）が選考対象となった。

2. 選考委員（敬称略）

難波秀行（委員長）、園部豊（幹事）

第1次選考委員：小林雄志、佐藤 和、鈴木久雄、園部 豊、
田原亮二、中田征克、中山正剛、難波秀行、
西垣景太、西脇雅人、西原康行、平工志
穂（以上、「大学体育スポーツ学研究」編
集委員）

第2次選考委員：難波秀行（委員長）、園部豊（幹事）

梶ちか子、齊藤好史、中原雄一、満石寿

3. 選考結果

第1次選考では、選考委員それぞれより優秀論文賞に該当する2論文の推薦がなされた。次に、第1次選考にて推薦された論文のうち、推薦数が多かった上位2論文を第2次選考の対象とした。第2次選考では選考委員が2論文に対して量的・質的評定を行い、最終的に以下を受賞論文として決定した。

受賞論文名

大学体育授業における動機づけ雰囲気と主観的恩恵評価の関係：受講種目と性別の違いに着目して

著者：中須賀巧、木内敦詞、西田順一、橋本公雄

掲載：大学体育スポーツ学研究 第17号，pp.12-22

II. 講評

著者は、大学設置基準の大綱化以降における大学体育授業を設置する意義として、心身の成長、健康の改善、体力の維持、スポーツ文化の継承を挙げ、受講した学生自身が授業を通じてどのように理解（知覚）したかといった主観的

恩恵に着目している。さらに、主観的恩恵を高める要因として授業の動機付け雰囲気に着目し、能力に価値が置かれ競争を通しての達成が重視される成績雰囲気と努力に価値が置かれた熟達に至る過程が重視される熟達雰囲気に言及している。学生自身はどのような恩恵が得られるのか、さらにはより効果的に恩恵が得られるようにするには、どのような授業づくり（動機付け）が重要なのかは、多くの大学の共通したテーマだと考えられる。このような背景に基づき、体育授業における動機付け雰囲気と主観的恩恵評価について、国公私立6大学1370名を対象に調査を行い、包括的な分析を試みている。

この調査では、熟達雰囲気、すなわち結果に至るまでの努力や頑張りが評価され、たとえ技能が十分でなくても周囲から練習をする姿勢が評価されることが認知されている場合には、主観的恩恵を高く評価していることを示している。熟達雰囲気が強調された環境下では余計なプレッシャーや不安を抱かずに楽しみながら運動を実施できることを考察されている。一方、成績雰囲気、すなわち、運動技能や結果を重視した雰囲気を認知している学生ほど体力・身体活動、規則正しい生活への評価が高くなる傾向があったこと述べている。しかしながら、成績雰囲気の負の影響として協同プレーに対する理解やコミュニケーションの重要性に気づきにくいことを示している。

受賞論文は、体育授業の価値を問い直す上で有用なデータとその解釈を述べており、まず熟達雰囲気づくりを心掛け、どのような恩恵を得ることができたかを学生自身が実感できることを提案している。一方、成績雰囲気の授業を否定するのではなく、身体的効果や運動行動を重視した場合には、ストレ対処や協同プレーが出来ているか、ネガティブな発言が増加していないかへの注意を促している。本研究は、多様化する学生のニーズに応えた大学体育の授業づくりを検討する上で、多くの教員にとって有用な情報を提供していると考えられる。

以上